



京大広報

No. 606

2005.11

目次

〈大学の動き〉

尾池総長が日瑞学長会議に出席……………2030
ストックホルム王立工科大学との学術交流…2030

〈部局の動き〉

ナノメディシン融合教育ユニットの開講式を開催
……………2031

〈日誌〉……………2031

〈寸言〉

日本の焼物に想う 金重 愨……………2032

〈随想〉

“最後にしたい事, 言いたい事”
名誉教授 木村 光……………2033

〈洛書〉

楽園での63日間 喜多恵子……………2034

〈文化交流〉

アメリカ滞在記—LEAPプログラムに参加して—
掛村純子……………2035

〈栄誉〉

藤吉好則理学研究科教授が第10回慶應医学賞を
受賞……………2037

〈話題〉

近畿地区国立大学体育大会成績……………2038
国立七大学総合体育大会 惜しくも3位……………2039

「ジュニアキャンパス2005」を開催……………2040

「シニアキャンパス2005」を開催……………2040

第4回Clock Tower Concert ジュニアオリジナル
コンサート in 京都大学を開催……………2041

京都大学未来フォーラム(第17回)を開催……………2041

原子炉実験所で労働衛生週間の実施……………2042

全教職員一万人を対象にした安全衛生講習を
実施中……………2042

教職員を対象とした普通救命講習会に
215名参加—吉田事業場……………2043

教育学研究科附属臨床教育実践研究センター
公開講座「子どもたちと暴力」を開催……………2043

ガブリエレ・プロイ レクチュア&コンサート
「オーストリアン・サウンドスケープ」を開催……………2044

医学部附属病院が大阪地方裁判所との懇談会を
実施……………2044

〈訃報〉……………2045

〈お知らせ〉

化学研究所第105回研究発表会……………2047

能楽鑑賞会……………2047

第8回情報学シンポジウム……………2048

再生医科学研究所平成17年度学術講演会……………2048

〈編集後記〉……………2048



シニアキャンパス/ジュニアキャンパス
—関連記事 本文2040ページ—

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学の動き

尾池総長が日瑞学長会議に出席

尾池和夫総長は、日本大学学長団の一員として、10月18日（火）～22日（土）にスウェーデンで開催された日瑞学長会議に出席した。日本からは、京都大学の他に、北海道大学、東北大学、東京大学、東京農工大学、東京工業大学、一橋大学、名古屋大学、大阪大学、広島大学、九州大学、岩手県立大学、会津大学、首都大学東京、慶應義塾大学、早稲田大学ならびに立命館大学の学長等が参加した。平成15年にスウェーデンの学長団を受け入れたことにより、今回、スウェーデンにおいての日瑞学長会議が実現したものである。

10月18日、スウェーデン王立科学アカデミーにて、



ノーベル医学・生理学賞を決定する
カロリンスカ大学の円卓にて

Bo Sundqvistウプサラ大学長・スウェーデン高等教育協会会長ならびにJan Lindstenスウェーデン王立科学アカデミー学長からの挨拶でセミナーが始まり、尾池総長が“Strategic planning within universities”のテーマにより、京都大学の現状と施策についてプレゼンテーションを行い、好評であった。その後ノーベル記念館を訪問し、展示を見学した。

19日から20日にかけて、ストックホルム王立工科大学、カロリンスカ研究大学、スウェーデン農業科学大学ならびにウプサラ大学を訪問した。訪問先の各大学では、研究施設の見学や特徴的な研究内容についての説明を受け、充実した時間を過ごした。

なお、19日にはストックホルム王立工科大学との間で、「学術交流に関する一般的覚書」に署名し交換した。

21日には、ウプサラ大学で開催されていたヨーロッパ大学連合 (European University Association) の会合に参加した。この会合では、“Research in Europe: Strategies and Funding”等のテーマでセッションや分科会が開かれており、大学の予算確保についてフォード社の役員がスピーチをするなど、様々な分野からの出席者があり、刺激を受けるものであった。

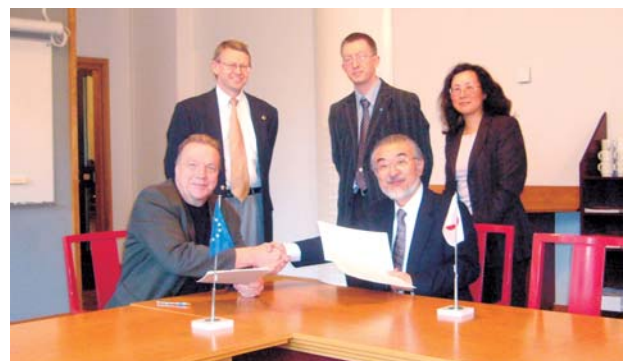
ストックホルム王立工科大学との学術交流

本学とスウェーデンのストックホルム王立工科大学は、大学間学術交流協定の締結について協議を重ねてきたが、このたび本学と同大学の教育・研究の交流と協力を推進するための「学術交流に関する一般的覚書」を交換した。

本学とストックホルム王立工科大学との「覚書」は、本学尾池和夫総長とストックホルム王立工科大学Anders Flodström学長の署名により、平成17（2005）年10月19日（水）に交換された。

同大学は1827年に創設され、バイオテクノロジー学部・電子工学部・情報工学部等の9学部、および大学院2専攻を有する国内では最大規模の工科大学。

教職員数は3,100人。学部生は11,000人。院生は1,500人。
ホームページは<http://www.kth.se/eng/index.html>



覚書を交換し握手する尾池総長（右）と
Flodström学長（左）

部局の動き

ナノメディシン融合教育ユニットの開講式を開催

平成17年度文部科学省科学技術振興調整費新興分野人材養成プログラムとして、本学の「ナノメディシン融合教育ユニット」が採択された。本教育プログラムの開講にあたり、10月4日（火）芝蘭会館において開講式を実施し、尾池和夫総長、文部科学省科学技術・学術政策局の河村潤子科学技術・学術総括官から挨拶があった。

本教育プログラムは、ナノテクノロジーとライフサイエンスの異分野融合により初めて実現できる、「ナノメディシン」という高度先端医療に関する基礎・応用研究を行える研究者・技術者を育成することを目的としている。医学研究科・工学研究科・再生医科学研究所が連携し、医学部保健学科の協力を得て「ナノメディシン」に関する大学院レベルの講義および実習プログラムを大学院生、ならびに応募された社会人にも広く提供することにより、産官学で先端医療における諸問題の解決に当たることがで



開講式で挨拶する尾池総長

きる高度な能力を備えた人材を育成する。これにより新しいナノメディシン融合分野での開発研究の進展が期待される。

（大学院医学研究科・大学院工学研究科・再生医科学研究所）

日誌 2005.9.1～9.30

- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| 9月1日 全学教育シンポジウム(2日まで) | 21日 国際交流委員会 |
| 5日 役員会 | 22日 総長の復旦大学訪問(25日まで) |
| 6日 人権委員会 | 23日 ジュニアキャンパス(24日まで) |
| 〃 企画委員会 | 26日 博士学位授与式 |
| 8日 財務委員会 | 〃 役員会 |
| 〃 人事審査委員会 | 〃 広報委員会 |
| 9日 学生部委員会 | 27日 教育研究評議会 |
| 12日 役員会 | 〃 役員会 |
| 13日 保健衛生委員会 | 〃 企画委員会 |
| 〃 教育制度委員会 | 〃 シニアキャンパス(30日まで) |
| 〃 部局長会議 | 〃 ドイツ, Georg Schuetteアレクサンダー・ |
| 〃 アメリカ, Arden Bement 国立科学財団 | フォン・フンボルト財団事務局長 他3名, |
| 長官 他4名, 総長他と懇談 | 総長他と懇談 |
| 15日 施設整備委員会 | 28日 財務委員会 |
| 17日 京都大学原爆災害総合研究調査班遭難者 | 29日 入学者選抜方法研究委員会 |
| 慰霊の集い | 〃 全学共通教育システム委員会 |
| 20日 役員会 | 〃 I I Oフェア |
| 21日 大学入試センター試験実施委員会 | |

寸言

日本の焼物に想う

金重 愨

中学、高校のころからなんとなく農業にあこがれ、本学農学部に入學、諸般の事情により農業関係の仕事に就くことをあきらめ、家業である備前焼の仕事にかかわってはや30数年が経ちました。



備前、信楽、伊賀、常滑、越前、瀬戸。これら平安時代末期から続く窯を称して、日本六古窯と呼びます。私がかかわっている備前焼もそのひとつですが、瀬戸焼を除き、あとの五窯はすべて無釉の焼締陶、つまり釉薬（上釉）を使わず、1300度前後の温度で硬く焼き締めた焼物なのです。

そして極めて大雑把に言えば、これらの焼物は誕生以来約800年、ほとんどその形態を変えずに現代にまで至っている、世界的に見ても極めて珍しい焼物なのです。

一般論として、生産過程における技術革新により、産み出される製品はどんどんとその姿を変えてゆきます。

焼物の宝庫、中国を例にとってみます。中国の焼物も最初は土器でした。そのうちに多分自然釉（燃料が燃えた灰が器物につき釉状態となる）から釉薬を発見、その後、目を瞠るばかりの技術革新により青磁、白磁、三彩、染付等々、その時代、時代の美意識に裏付けられた様々な焼き物を生むにいたります。

これは中国陶器の何千年という歴史の中で行われたことであり、また多くの民族が覇を競い、様々な美意識の変化の中での変遷でもあったことから、すぐに日本の陶器と比較するのは無理もあるのですが、やはり縄文、弥生という土器から始まった日本の陶器の歴史は、備前焼、信楽焼等、無釉の焼締陶を生み出してからはほとんどその形態を変えていません。

その間、伊万里、鍋島、萩、唐津など、外国からの新しい技術を持った陶磁器が入ってきました。日本人はそれらを珍重し、受け入れながらも従来の日本陶の形態を変えることをしませんでした。

なぜなのでしょう。技術革新を甘受することは人類の常であるのに。

そこに日本人の美意識の一端（いや、それこそが日本人の美意識の本質かとも思うのですが）が隠されているように思われます。

昨今の話です。ある中国人が備前焼の窯場を訪れ、窯から出された作品を見て驚いたそうです。「どの作品にも表面に石の粒が突き出していたり、ひどいものには小さなひび割れさえはいつている。完品はほとんどないじゃあないか。」

表面にピンホールひとつあっても完品とはいえないほどの中国の陶器の見方からすると、当然のことなのでしょう。

しかしながら日本人の見方は違います。

表面に突き出した石粒は「石はぜ」とよびその石粒に自然の中の岩肌を想い、愛でます。小さなひび割れは（時にはかなり大きな割れをも）それが窯の中で出来たものなら（窯疵といいます）これを許し、鑑賞の対象とします。

そういえば、古来、陶磁器の銘（優れた作品につける特別な名前）には自然からとったものが数多くあります。座右の名品図録からざっと拾っただけでも、「残月」、「巖松」、「磯シミヅ」、「横雲」等々。

日本人は昔からこの日本の自然を愛し、大切にはぐくみ、同化して暮らしてきました。そのような生活の中で育まれた美意識が焼物の中にさえも自然を求めたのでしょうか。

科学技術の革新の中でしか生きてゆけない現代の人間が、技術革新を拒否したかのような焼物に自然を感じ安らぐ。

いまや欧米諸国の人々の中にも焼締陶に興味を持つ人が漸増していることは、この時代をある意味象徴しているかのように思えます。そして、この仕事に就いたことを喜ばしく思うのです。

（かねしげ まこと 備前焼作家、昭和44年農学部卒業）

随想

“最後にしたい事、言いたい事”

名誉教授 木村 光

2000年に名誉教授になって、早くも6年目である。60歳台の後半になると何となくこの世の覚悟を迫られてくる。最後に自分の人生を総括し、少しは社会の為になる事を提起し、“世に憚りたい”と考えている。



20世紀末に環境問題が浮上した。1984年以来、編集を続けている国際バイオジャーナル (*Appl. Microbiol. Biotechnol.*) にも環境関係の投稿が多くなった。私自身も「バイオと環境問題」の接点を探っていたので、95年、NHK人間大学のテキストを作る機会にその章を作り、その後、(株)グリーンバイオという大学発の環境バイベンチャーを立ち上げた。バイオマスからウレタン樹脂を作るほか、ポリ乳酸、ポリエステル等の「生分解性プラスチック」も扱い、京都中央市場で「生分解性の魚箱」を使う事業をコーディネートした。京都議定書の批准と異常気象のお蔭(?)で、ようやく大企業も動き出した。最近、農学部の協力を得て、“嵯峨の小倉山”が発祥の地といわれる「大納言小豆」の優良種をこの地に復活しようという運動もコーディネートしている。コーディネーターの役割を確立する事が必要で、大学発のベンチャーをいくつ作っても、コーディネーターがいなければ、進展しない。

大学は法人化され、教員も外部資金の導入を要求されるようだが、日本で知的財産をお金にするのは難しい。日本人には無体財産に対する価値認識が乏しいからである。京都市の関係スタッフも、バイオシティー構想のアドバイスとか仲介の労を取らせながら、黙示契約を遂行せず、名誉教授は只で使うものと心得ている。現役の先生方も対外交渉される場合には気を付けられた方がいい。一方、社会では拝金主義がはびこっている。最近のアスベスト問題も、欧米では1960年代に問題化しているのに対し、日本では、安全性よりも経済を優先してきた結果である。

リストラをしたり、子会社や下請けに負担を強要してでも、利益を出した社長を経済誌なども名経営者として持ち上げているが、編集方針を見直した方がいい。ポリ乳酸を作っていた会社から大手自動車会社に移った数人の中から自殺者が出たり、そこを逃げ出した人がいることはあまり知られていない。いくら多額の経常利益を出しても、人間を大切にせず、周辺の人々を窮境に落とし入れるような企業は優良企業とはいえない。

21世紀は生物学の時代といわれるが、ニュートン以来、物理学が科学理論の中心になっている。微生物から人間に至る生物学の科学理論を考えたいと思い、哲学科の内井惣七教授の格調高い「科学哲学」に興味深く拝聴させてもらっている。アメリカ産牛肉の狂牛病の確率は、帰納的に考えて、何処までいけば安全だといえるのだろうか?若い頃から興味があった哲学を勉強する機会と時間が得られた。昔はぴんとこなかったシーシュポスの不条理の哲学などもよく分かるような気がする。

話しかかるが、ゴルフは、文部省の国際交流計画で私の研究室に滞在したカルパー教授(現米ノートルダム大バイオセンター長)から習った。45歳から55歳まで、裏庭に夜間照明付きのグリーンを作って練習した。その後、忙しくなったのと所期の目標を達したので止めたが、一昨年カルパー教授の来日を機に、十数年振りに再開した。小学校以来の畏友A君(アメリカ三井物産OB)が熱心なので、童心に返って、よくコースをまわる。昔は、どこまでスコアを伸ばせるか修行の心算でやったが、今はもっぱら健康ゴルフである。先日、全京大のコンペがあり、久し振りで、沢田元総長と一緒にまわった。次回の幹事をお引き受けすることになったので、できるだけ多くの先生方にご参加いただきたいと願っている。

(きむら あきら 元食糧科学研究所教授、グリーンバイオ(株)代表取締役、AMB国際編集局主宰)

洛書

楽園での63日間

喜多 恵子

2年前の秋、私はグレン・グールドのバッハ全集全曲を聴く機会に恵まれた。

9月のはじめ、医師から手術を勧められて入院の準備に取り掛かった。生まれたときから元気だけが取り柄といわれ続けた私は、事態の推移

を深刻には受け止めていなかった。術後の食事制限はないと医師から説明を受けていたが、しばらくは好き勝手できないだろうから、心残りのないように手術直前までアレもコレも飲んで食べるつもりでいた。しかし、検査のための入院から退院することなくそのまま手術入院になり、しかも絶食を宣告されたため、計画は早々に頓挫した。当時中年太りが急速に進行中であった私は、術前2週間で、まず4キロの減量に成功した。

6人部屋の患者さんは私以外は食事が摂れる状態だったので、3度の食事どきと食べ物の話題で盛り上がる面会時間が何より辛かった。同室の患者さんが何気なく「まだ若いのにかわいそう」と呟いたとき、術後は、個室に隔離してもらわないと大喧嘩しそうな気がした。手術の日が近づくにつれてどんどん不機嫌になり、音楽を聞くどころではなくなった。

術後は、絶食に加えて絶飲も指示された。我慢できないわけではなかったが、2週目の朝、歯を磨くときに試しに水を一口飲んで様子をみた。発熱でもしてバレるのではないかと内心恐れていたが、何ともなかった。指示を守らなかったのはこの一回限りです。すみません。多くの医師や看護師が頻繁に病室を訪れて声をかけてくれたおかげで、一日一日自分でも驚くほど体は元気になっていった。術後18日目には経口摂取が許可されたので、術後5週間以内に退院できると楽観していた。手術の説明を受けた際、これまで術後5週目で退院した人がいると聞いていたので、この記録を破るつもりでいた。ところが、食事が摂れるようになってからのほうが肉体的にも精神的にも参ってしまった。

重湯からはじまり全粥までだんだん上げられるの



だが、初めのうちは食後30分足らずで排泄されてしまい、虚しかった。また、検査の結果次第では絶食になることもあり、いったん配膳された食事を目の前にして、医師の指示を1時間ほど待ったのち、下膳されることも度々あった。いわゆるグルメ番組とアルコール飲料のTVコマーシャルがやたら目に付き、気に障った時期があった。TVを見なければいいのはわかっているのだが・・・

やがて食べた物が体の中に留まるようになり、さまざまなチューブから開放されて、シャワーが使えるようになった。それまでは看護師さんに全身を拭いてもらっていた。術後間もないころ、一度だけ若い男性の看護師さんが担当してくれたときは、心拍数が普段の倍くらいに上昇した（ような気がする）。まだまだ修行が足りないことを痛感した。

食事が待ち遠しくなった術後5週目の終わり頃から、退院後の生活が気になり始めた。お酒を飲んでもいいか尋ねてみたが、主治医の先生の歯切れが悪い。8キロの減量に成功し、好みの曲ばかりを聞くようになった術後49日目に楽園から追放され、2週後の外来で聞いた答えは、予想したとおりだった。これまで酵母の代謝産物が取り持つ縁で、びっくりするような人との出会いがあった。医師の忠告には極力従うように努力はしているが、お付き合いはやめられそうにもない。あれから2年、カビの加水分解酵素に消化を助けてもらったおかげで、おヘソの周りがまた豊かになってきた。食べ物の好みは手術の前後でかなり変化したが、音楽の好みは病名が確定した後も変わっていない。

ところで、当時は午後7時に面会時間終了を告げる音楽が放送されていた。面会に来た家族が、居心地を悪くさせる効果は抜群だと言っていた。今でもときどき私の頭の中で奏でられる曲の名前と選曲した理由をご存知の方は是非教えてください。お世話になった京大病院の医師と看護師のみなさん、ほんとうにありがとうございました。最悪の場合を想定して入院前に撮影したポートレートはまだ出番がない。

(きた けいこ 大学院農学研究科教授、専門は応用微生物学、応用酵素学)

文化交流

アメリカ滞在記
—LEAPプログラムに参加して—

掛村 純子

平成16年4月から1年間、「国際教育交流担当職員長期研修プログラム(LEAP)」に参加させていただき、アメリカ合衆国モンタナ州とアリゾナ州に滞在しました。LEAPは、全国の国立大学や研究所の事務職員を対象とした文部科学省主催のプログラムで、語学研修、アメリカの高等教育制度に関する研究、大学の国際交流関係オフィスでのインターンシップなどを行います。事業としては昨年度8年目で、京都大学からの参加は私で6人目となりました。

モンタナ州立大学(MSU)のOffice of International Programs(OIP)が年間を通したLEAPの受入機関となっており、毎年参加者はプログラムの前半をMSUで過ごします。7名の仲間と共に、私もOIPが用意してくれた様々な研修に参加しました。

渡米後まず3ヶ月間、American Cultural Exchange(ACE)という語学学校で英語の集中講義を受けました。ACEは、主にMSUへの入学を希望する英語を母国語としない人たち向けの学校で、授業の大部分は、論文執筆やプレゼンテーション、ディベートなど、アメリカの大学で学ぶ上で必要となる技術の習得にあてられます。社会人になって以来、机に向かって勉強することなどなかった私にとって、アメリカ式の授業形式はカルチャーショックであり、慣れるまでに相当時間がかかりました。毎日出される膨大な量の宿題に加え、授業中は何かにつけ意見を



キャンプで行ったグレイシャー国立公園(モンタナ州)

求められ、人前で発表する機会も多々あり、自分の英語力のなさや論理的に素早く物事を考える力の不足を痛感した3ヶ月でした。

MSUのサマーコースの授業も聴講しました。授業中、講師が一方向的に話をするのは短時間で、多くの時間は学生の討論や発表にあてられました。アメリカの学生は、授業中ガムを噛んだり机に足を上げたり、決して授業態度がいいとは言えませんが、毎日テキストを何十ページも読みこなしてレポートを書き、本当によく勉強していました。わからないことがあれば遠慮なく講師に質問し、どんどん話題が膨らんでいきます。私はそのやりとりを聞き取るだけで必死でしたが、講師も学生もお互いその質疑応答の時間を楽しんでいるようでした。

その他、モンタナ滞在中は、コロキアム(週1回、アメリカの高等教育専門家による研究討論会)、OIPでのインターンシップ、ワシントンDCの教育機関視察、NAFSA(アメリカの国際教育交流に携わる大学教職員等の団体)会合出席など、OIPによって綿密に練られたスケジュールに沿って、非常に忙しくも充実した日々を送りました。

一転して、プログラムの後半は、参加者一人ずつ全米の別々の大学に配属され、インターンシップ中心の生活を送ります。私は、学生数5万人、全米4番目のマンモス大学であるアリゾナ州立大学(ASU)を研修先を選びました。それまでいろいろ世話してくれたモンタナのOIPスタッフや日本から一緒に来た研修仲間と離れ、誰一人知り合いがない土地での生活が始まりました。



ACEのクラスメートたち

私は、ASUの3つの国際交流関係オフィスで、約1ヶ月半ずつインターンシップを行いました。International Programs Office (IPO)は主に学生の留学を扱う部署で、留学フェアのお手伝いをしたり、日本へ留学を希望する学生の相談に乗ったりしました。大学附属の語学学校であるAmerican English and Culture Programでは、生徒獲得のためのマーケティング会議に出席したり、宣伝パンフレットを作ったりしました。Center for Asian Studiesでは、中国絵画の展覧会やアジア映画祭のお手伝いをしました。それぞれ短期間でしたが、3つのオフィスで働くことによって、様々な仕事内容に触れることができ、また交友関係も広がったのでよかったと思います。

インターンをしていて印象的だったのは、個人主義が浸透していると言われるアメリカで、意外なほど皆協力し合い、情報交換しながら仕事していることでした。スタッフは皆個室を持ち、普段は自分の部屋にこもって仕事することが多いですが、どのオフィスでも週1回必ずスタッフミーティングを開き、それぞれ今自分が抱えている仕事の状況を報告し合っていました。日本では、大部屋で仕事をしているのも、他の人がどんな仕事をしているのかわからないことがままあります。アメリカでは普段独立して仕事している分、意識して情報を共有しようとしているような印象を持ちました。またIPOでは年に数回、アリゾナ州内の他の州立大学の同様のオフィスと合同でワークショップを開催し、頻繁に変わるアメリカの入国管理システムをはじめ留学事務に関わる各大学共通の事柄について、最新情報を交換していました。日本では、事務職員同士が情報交換する機会はありませんが、同じような仕事を担当する者同士が、大学の枠を超えて意見交換できる場を持つことは、とても有意義だと思いました。

アメリカで過ごした一年間、学校やインターン先だけでなく、普段の生活を通して、様々なことを学びました。自分自身が外国で生活して初めて知った不安や孤独は、今後大学職員として働いていく上で、留学生や外国人研究者の気持ちを理解するための力になると思います。



インターン先の上司の家でクリスマスパーティ

また、留学生を自然に受け入れ、全面的にバックアップするアメリカの大学、地域の人々の姿勢に感銘を受けました。私もどれだけの人に助けられ、親切にしてもらったかわかりません。日本で暮らす外国人のことを考えた時、私がしてもらったのと同じだけのサポートを、私たちがしてあげられているとは残念ながら思えません。

アメリカで、日本に滞在経験のある人に何人か出会いました。そのうちの一人は、日本人は親切だが、どれだけ長く住んでいてもいつまでもお客様扱いされて自尊心が傷つけられたと言っていました。移民の国だからでしょう、アメリカで私はそのような思いをしたことはありません。外国人だからと言ってゆっくり話してくれることもなく、厳しさも感じましたが、同時に特別扱いされないことに心地よさを感じました。私も今後外国人と接する時には、過剰な親切ではなく、相手を尊重した自然な形での接し方を心がけたいと思います。

4月より国際交流課に配属され、国際シンポジウムの開催や協定校との交流事業などを担当させていただいています。LEAPで学んだことを最大限に生かして、京都大学の国際交流に少しでも役立ちたいと思っています。最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださった京都大学と文部科学省に心から感謝しております。

(かけむら じゅんこ 研究・国際部国際交流課職員)

栄誉

藤吉好則理学研究科教授が第10回慶應医学賞を受賞

このたび、藤吉好則理学研究科教授が第10回慶應医学賞を受賞されることになりました。授賞式は、12月6日（火）に慶應義塾大学医学部において行われる予定です。

慶應医学賞は、世界の医学・生命科学の領域において医学を中心とした諸科学の発展に寄与する顕著、かつ創造的な業績をあげた研究者を顕彰するため1996年の創設以来、国内外の多数の有識者から推薦された候補者の中から、国外・国内の研究者それぞれ1名の計2名に授与されてきましたが、昨年度からは国内外を問わず1名だけが選ばれています。

以下に同教授の略歴・業績等を紹介します。

藤吉好則教授は、昭和46年名古屋大学理学部化学科を卒業、同49年に京都大学大学院理学研究科に進学し、同57年に理学博士の学位を授与された。昭和55年京都大学化学研究所教務職員、同60年同助手、同62年蛋白工学研究所主任研究員、同63年同主席研究員、平成6年松下電器国際研究所リサーチディレクターを経て、同8年京都大学大学院理学研究科教授となり、構造生理学を専門として現在に至っている。平成10年より理化学研究所播磨連携メンブレンダイナミクス生体マルチソームチームチームリーダー、同15年より同グループリーダー、同12年から16年まで産業技術総合研究所生物情報解析研



究センター高次構造解析チームチームリーダーも併任されている。

藤吉教授は、昭和63年に日本電子顕微鏡学会（現日本顕微鏡学会）瀬藤賞を受賞、平成17年には産学官連携功労者科学技術政策担当大臣賞、財団法人材料科学技術振興財団山崎貞一賞等を受賞された。藤吉教授は水チャンネルやアセチルコリン受容体、バクテリオロドプシン、さらには各種のイオンチャンネルなどの膜蛋白質の構造を解析したが、これらはいずれも医学や生物学的に重要かつ技術的に高いハードルを持つものばかりである。今回の慶應医学賞受賞は、藤吉教授ご自身の強力なイニシアチブと情熱が高く評価されたと同時に、さらなるご活躍を期待されてのものと思われる。

（大学院理学研究科）

話題

近畿地区国立大学体育大会成績

第43回近畿地区国立大学体育大会は滋賀大学の当番により、5月8日(日)のラグビーから8月25日(木)水泳にかけて熱い戦いが繰り広げられた。

本年度から予算等の節約もあり、各大学での分散開催となり本学でも柔道(8月13日(土))や軟式

野球(8月15日(月)~18日(木))を開催した。本学は男子が2位、女子は9位であった。なお、本大会の成績は以下のとおりである。

(学生部)

得点表(女子)

種目NO	種目名	大学名											
		滋賀大	京都大	京教大	工織大	大阪大	大外大	大教大	神戸大	兵教大	奈教大	奈女大	和山大
1	陸上競技			10				7	4		5		
2	水泳			5		7		10	4				
3	テニス					7			10	4		5	
4	ソフトテニス			4.5				4.5	7		10		
5	バスケットボール			5				10	7	4			
6	バレーボール	4.5	4.5	10				7					
7	サッカー			4.5				10			4.5		7
8	卓球					5			10			7	4
9	バドミントン	4	10	5					7				
10	剣道	7						4.5	10	4.5			
11	体操競技							10	7				
12	ハンドボール			7				5	10		4		
13	弓道	7		4								5	10
合計得点		22.5	14.5	55	0	19	14	81	53.5	12	19.5	17	21
総合順位		4	9	2	12	7	10	1	3	11	6	8	5

得点表(男子)

種目NO	種目名	大学名											
		滋賀大	京都大	京教大	工織大	大阪大	大外大	大教大	神戸大	兵教大	奈教大	和山大	
1	陸上競技		10			7		5	4				
2	水泳		5			7		10	4				
3	野球			5				10	4			7	
4	軟式野球		7			4		10	5				
5	テニス		7			5		10				4	
6	ソフトテニス		10			7		4.5	4.5				
7	バスケットボール		4			7		10	5				
8	バレーボール					4.5		10	7				4.5
9	サッカー			7		5		10	4				
10	ラグビー	4.5						4.5	10	7			
11	卓球		5			7			10				4
12	バドミントン		7		5	4		10					
13	柔道	10	5			4			7				
14	剣道		10			7		4.5		4.5			
15	体操競技		7					10	5				
16	ハンドボール	4	7	5				10					
17	弓道				10			4	7				5
合計得点		18.5	84	17	15	68.5	4.5	128	73.5	4.5	0		24.5
総合順位		6	2	7	8	4	9	1	3	9	11		5

国立七大学総合体育大会 惜しくも3位

第44回国立七大学総合体育大会が本年8月6日（土）の開会式を挟み、昨年12月11日（土）の「アイスホッケー」を皮切りに9月23日（金）の閉会式まで、27競技種目にわたり九州大学の主管で開催された。

本学は、順調なスタートを見せ中間発表時には1位におどり出たが、その後九州大学や北海道大学が安定した戦いぶりをみせ、最後の追い上げも実らず3位という結果となった。

(学生部)
(最終成績)

	北海道大学		東北大学		東京大学		名古屋大学		京都大学		大阪大学		九州大学		
	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	
アイスホッケー	1	10	2	8	5	3	4	4	6	2	7	1	3	6	
スキー	—	—	—	—	3	3	4	2	2	4	1	6	5	1	
航空(グライダー)	—	—	3	4	4	3	1	8	2	6	5	2	6	1	
馬術	4	3	6	1	5	2	3	4	2	6	—	—	1	8	
柔道	3	5	2	8	6	1.5	6	1.5	5	3	3	5	1	10	
硬式テニス	男子	7	1	3	6	6	2	1	10	5	3	2	8	4	4
	女子	5	3	4	4	1	10	3	6	7	1	2	8	6	2
ヨット	2	6	5	2	6	1	—	—	4	3	3	4	1	8	
水泳	1	10	7	1	4	4	3	6	2	8	5	3	6	2	
空手道	5	3	7	1	1	10	6	2	4	4	3	6	2	8	
少林寺拳法	4	4	5	3	6	2	7	1	1	10	2	8	3	6	
剣道	男子	6	2	5	3	4	4	3	6	2	8	7	1	1	10
	女子	3	6	7	1	4	4	6	2	5	3	1	10	2	8
バスケットボール	男子	2	8	5	3	4	4	6	2	3	6	7	1	1	10
	女子	1	8	2	6	—	—	4	3	6	1	3	4	5	2
ハンドボール	5	1	4	2	2	4	—	—	3	3	—	—	1	6	
陸上競技	男子	7	1	2	8	5	3	3	6	1	10	4	4	6	2
	女子	7	1	4	4	3	6	1	10	2	8	6	2	5	3
フェンシング	4	3	3	4	6	1	—	—	1	8	2	6	5	2	
バドミントン	男子	3	6	2	8	5	3	1	10	6	2	7	1	4	4
	女子	1	10	4	4	7	1	3	6	2	8	6	2	5	3
ラクロス	男子	5	3	4	4	2	8	7	1	6	2	3	6	1	10
	女子	3	2	—	—	—	—	—	—	1	4	4	1	2	3
準硬式野球	2	8	3	6	7	1	5	3	6	2	1	10	4	4	
バレーボール	男子	6	2	7	1	3	6	4	4	5	3	2	8	1	10
	女子	2	8	3	6	7	1	4	4	5	3	6	2	1	10
硬式野球	1	4	—	—	—	—	2	3	—	—	3	1.5	3	1.5	
弓道	男子	2	8	3	6	1	10	6	2	5	3	7	1	4	4
	女子	3	6	5	3	4	4	1	10	6	2	7	1	2	8
自動車	2	8	3	6	7	1	5	3	6	2	4	4	1	10	
ソフトテニス	男子	4	4	6	2	1	10	5	3	2	8	3	6	7	1
	女子	1	10	4	4	7	1	2	8	3	6	5	3	6	2
洋弓(アーチェリー)	7	1	6	2	5	3	1	10	4	4	3	6	2	8	
ゴルフ	4	4	5	3	3	6	2	8	1	10	7	1	6	2	
体操	2	8	7	1	3	6	6	2	1	10	5	3	4	4	
卓球	男子	5	2	3	4	—	—	6	1	1	8	4	3	2	6
	女子	1	6	5	1	—	—	3	3	—	—	2	4	4	2
総合得点	175.0		130.0		128.5		154.5		174.0		142.5		191.5		
総合順位	2		6		7		4		3		5		1		

※採点方法 全大学が参加の場合、1位10点、2位8点、3位6点、4位4点、5位3点、6位2点、7位1点
参加大学が6校の場合は1位8点、5校の場合は1位6点のように、参加大学数に応じて配点を減ずる。

「ジュニアキャンパス2005」を開催

9月23日（金）～24日（土）の2日間の日程で、京都市およびその近郊の中学生・保護者等を対象として京都市教育委員会との共催により、「ジュニアキャンパス2005」が開催された。

初めて企画された今回は、「学問の不思議を知ろうー京都大学を体験する」をテーマにしたもので、142名の中学生と42名の保護者等が参加した。

1日目の午前中は、「元素周期表ー身の回りのものはすべて元素でできている」と題する、名誉教授の理化学研究所・玉尾皓平フロンティア研究システム長と本学の2名の教授による特別講義（パネルディスカッション）や、「子どもの才能を最大限に伸ばす子育て」と題する東山紘久副学長の保護者向け講演会などが行われた。

また、1日目の午後と2日目は、吉田・宇治および桂の3キャンパスにおいて、「絵から見た人間の心の不思議」、「ファンタジーはなぜ面白いのか」、「光り輝くプラズマの世界」、「おいしさを科学で解明する」、「農業の魅力ってなんだろう」など、バラエティー豊



ゼミ『クルマの構造をデザインする』の様子

かな少人数による29の授業（ゼミ）が行われた。

参加した中学生からは、「貴重な体験ができる授業ばかりでした。今までの考え方が変わったり、より深まったりもしました」「とても楽しく充実した2日間でした」「機会があればもう一度参加したい」などの声が寄せられ、好評のうちに終了した。この企画は、来年度も引き続き開催される予定である。

（学生部）

「シニアキャンパス2005」を開催

本学は、「交響する身体ーひと・もの・自然を考える」をテーマに、9月27日（火）から30（金）の4日間にわたり、JTBの協力を得て合宿形式による「シニアキャンパス2005」を開催した。参加者は、北は北海道、南は宮崎県と幅広く、全国各地から37名が受講した。

初日は、尾池和夫総長の記念講義「地震を知って震災に備える」や家森幸男名誉教授による「健やかな生命の調べー遺伝子の音符で奏でる生老病死の四楽章」の講義などが、2日目からは、東山紘久副学長や本学の教授陣による講義や、町家・森・平安京をテーマに現地へ出向くフィールド学習が行われ、総合博物館や附属図書館、時計台記念館の免震装置などを見学する「ミニツアー」も実施された。夜には、ホテルで教員スタッフや学生スタッフも交えた「学びを語る夕べ」などが行われた。また、自由参加である初日の夜の「未来フォーラム」や最終日の「総合博物館ツアー」にも多くの受講者が参加し好評であった。

4日間の課程を修了した受講者には、東山紘久副学長から、感謝と敬意をこめて一人ひとりに修了証



フィールド学習『平安京を歩く』

書が手渡された。

受講者からは、「内容が濃密で知識が豊かになり、物の視点・観点が広く深くなった」「セカンドライフの示唆となった」「日常生活から離れたオアシスであった」などの好意的な感想が寄せられている。

なお、今回、初めて全学企画として実施したシニアキャンパスは、来年度も引き続き開催される予定である。

（学生部）

第4回 Clock Tower Concert ジュニアオリジナルコンサート in 京都大学を開催

社会に開かれた取り組みの一貫として、9月25日（日）に第4回Clock Tower Concert—ジュニアオリジナルコンサート—が、約400名の聴衆の参加を得て時計台記念館百周年記念ホールにおいて開催された。

今回のコンサートは、株式会社JEUGIA・財団法人ヤマハ音楽振興会西日本支部の協力を得て、ジュニアの創造性豊かなオリジナルの作品を作曲者本人が演じるほか、本学の交響楽団やハイマート合唱団との共演曲が演奏された。それぞれの作品は、組曲「魔法使いのパーティー」などかわいらしいタイトルのもや、「ピアノ協奏曲第1楽章」など力作揃いで、演



本学交響楽団と共演する演者

奏が終わると客席からは惜しめない拍手が送られた。

京都大学未来フォーラム(第17回)を開催

9月27日（火）に時計台記念館百周年記念ホールにおいて、恒例となった未来フォーラムが開催された。17回目となる今回は、本学文学部の卒業生で能楽笛方森田流 帆足正規氏に「能をつかまえる」というテーマでご講演いただいた。

フォーラムでは、まず帆足氏の笛の実演があり、



笛の演奏を披露する帆足氏

約300名の参加者は、ひととき、静けさの中に力強い響きを持つ笛の音に酔いしれた。そのあと、今度は打って変わって気さくな人柄をにじませ、ご自身が能の笛方を志すことになった経緯などを話された。

「能をつかまえる」という表現は、帆足氏が、尾池総長のシンボルマークである鯰（ナマズ）からことわざの「瓢箪鯰（ひょうたんなまず：とらえどころのないさま）」を連想して選んだ言葉だそうだ。

能をつかみどころのないものと感じる帆足氏は、「能は単に型を教えるものではなく、腹の底から沸いてくるのを待つ」という師匠の指導方針について話された。能の世界に本学の自学自習の精神につながる要素が感じられ、参加者はメモを取るなど話に聞き入っていた。

また今回は、シニア・キャンパスのカリキュラムの一部にもなっており、シニア・キャンパス受講者約40名の方々が参加された。

原子炉実験所で労働衛生週間の実施

原子炉実験所では10月1日(土)から10月7日(金)の全国労働衛生週間中、労働衛生意識の高揚と自主的な労働衛生管理活動の促進を図るため、正門に労働衛生旗を掲揚するとともに、立看板により「全国労働衛生週間」の呼びかけと「働き過ぎていませんか 働き方を見直して心とからだの健康づくり」のスローガンを掲出した。

また、10月3日(月)の午後、当実験所の総括安全衛生管理者、衛生管理者および産業医が職場巡視を行い、最初に炉室、その後ホットラボラトリの各実験室、原子炉応用センターの各実験室、臨界集合体棟の各研究室、制御室、トレーサー棟の各実験室、研究棟の中央管理室、各実験室、工作棟、倉庫、廃棄物処理棟の処理工場、各実験室を巡視した。その結果、特に重大で緊急な改善を要する箇所はなかったが、巡視者から各部署の教職員に対し、より一層



総括安全衛生管理者等による職場巡視の様子

の労働衛生についての注意喚起が行われた。

当実験所では、労働衛生週間のみならず、今後とも全所的に労働衛生意識の向上と労働衛生管理に努めていくこととしている。

(原子炉実験所)

全教職員一人を対象とした安全衛生講習を実施中

学内教職員の安全衛生意識向上を図ることを目的とした安全衛生講習が、時計台百周年記念ホールを中心に開催されている。この講習は、民間に比べて20年遅れているといわれる大学の安全衛生管理の向上をめざして、環境・安全・衛生委員会要請のもと、すべての教職員を対象に今年度初めて実施された。



身近な問題に熱心に聴き入る参加者

10月5日(水)に行われた第4回目の講習では、最初に大寫幸一郎環境・安全・衛生委員会副委員長から、大学の安全衛生活動に関する状況や最近話題のアスベストについて報告が行われた。引き続き里村一成医学研究科国際保健学講座助教授による「労働衛生の基礎」、塩田一裕施設・環境部施設活用課専門員による「電気の安全について」、最後に財団法人京都工場保健会労働安全衛生コンサルタント高田志郎氏による「問題点の洗い出しと解決方法について」講義が行われた。500人収容のホールはほぼ満員となり、身近な問題を具体的にとりあげた内容に参加者からは「自分の身のまわりにあてはまることが多くあり参考になった」「日常的な慣れを再考したい」といった声が聞かれた。

9月8日(木)に第一回が開催された本講習は、およそ一人にものぼる全教職員の参加を目指して年度内にのべ20回程度実施される。

(環境安全保健機構)

教職員を対象にした普通救命講習会に215名参加＝吉田事業場

「あなたの行動で救える命があります」をキャッチコピーにし、吉田事業場においてAED（自動体外式除細動器）が4台設置されるのに伴い救命講習会が実施されている。この講習は吉田事業場衛生委員会の要請で9月27日（火）、30日（金）、10月7日（金）



AEDの使用実技講習を受ける職員

の計3回実施され、毎回40名の募集をしたが50名前後の応募がありその関心の高さがうかがえる。また追加で開催予定分10月25日（火）と11月2日（水）の2回でも計65名が参加予定である。

従来の講習ではCPR（心肺蘇生法）を中心に指導されていたが、この講習会は昨年7月より法令改正で一般の人にも使用可能となった自動式の除細動器の使用法を付け加え、午後1時から午後4時45分までの講習となった。講師は京都市消防局左京消防署警防課の救急係長をはじめ救急隊隊長や隊員が担当し、実際に即した実技指導により短い時間であったが充分役立つ技術が学べた。

今後も継続して開催するよう要望も強く、継続して開催していく予定である。

（環境安全保健機構）

教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公開講座「子どもたちと暴力」を開催（21COE「心の動きの総合的研究教育拠点」共催）

臨床教育実践研究センターでは、毎年、深刻化する教育問題への取り組みの一環として、現代人の心の理解に主眼をおいた公開講座を開催している。

今年は、ユング派分析家のAllan Guggenbühlセンター客員教授と河合俊雄教授を講師として、10月16日（日）の午後1時から、百周年時計台記念館国際交流ホールで行った。

講演では、学校現場などにおける子どもの暴力の問題について、スイス、オーストリア、スウェーデン、アメリカなどさまざまな国々において直接学校と関わる中で解決への成果を上げておられるその理論的背景と実際について、具体的な例を交えながら分かりやすく取り上げられた。後半の質疑応答では参加者からの活発な質問や意見が出され、子どもたちをめぐる暴力の問題を通して、現代の子どもの心の様相やそれへの対応についてフロア全体で深める場となった。



質疑応答では活発な意見交換が行われた

本講座は、毎年参加者から好評を得ており、複雑な心の問題を理解していく上で不可欠な、人間の存在自体を見つめ直すことに繋がるテーマが話し合われる貴重な機会となるよう、来年度以降も開催していくことを考えている。

（大学院教育学研究科）

ガブリエレ・プロイ レクチュア&コンサート「オーストリアン・サウンドスケープ」を開催



ガブリエレ・プロイさん

都市のサウンドスケープ(音の風景)をテーマにした作品で知られ、ヨーロッパの都市をはじめ世界各地の「音の風景」を素材にした作品を制作している。

全学共通教育講義「サウンドスケープー音のエコロジー」の一環として、オーストリア・ウィーン在住の作曲家ガブリエレ・プロイさんのレクチャー&コンサートが10月21日(金)(16:30~18:00) 人間環境学研究科地階大講義室で開催された。この企画は、2005年日本・EU市民交流年参加イベント「オーストリアン・サウンドスケープ」の一部で、オースト

リア外務省・同駐日大使館の協力によるものである。

当日はまずプロイさんが自らの作曲家としてのスタンスの置き方と作品(サウンドスケープ・コンポジション)を解説し、引き続きCD演奏を行った。

紹介された作品は、1)「ウィーン西」駅の音を素材として、構成した作品Wien West Bahnhof(1997)、2)北オーストリアのWaldviertel地域の自然の音風景の変化を追ったWaldviertel(2005)、3)ハバナ(キューバ)の街を歩き交う車、自転車、オートバイ、船の汽笛、そして人々の元気な声でハバナの活気と人々の生活を描いたHabana(2002/2003)で、参加者は25名であった。演奏のあと熱心な質疑が行われた。

(アジア・アフリカ地域研究研究科)

医学部附属病院が大阪地方裁判所との懇談会を実施

医学部附属病院は、10月21日(金)に大阪地方裁判所との懇談会を実施した。

同懇談会は、2部構成で行われ、1部は講演方式に



1部での質疑応答の様子

よるもので100名余りの参加があり、大阪地方裁判所裁判官より医療訴訟において最も重要な裁判資料、重要な証拠となる診療録「カルテ」についての作成の実情と記載の在り方、ならびに異状死の届出について説明があった。特に、カルテの記載については「チーム医療から考えるとだれもがわかるカルテを書くこと。読みやすいカルテにすること。」等の説明があった。その後、質疑応答が行われた。

続いて行われた2部では、裁判官8名と鑑定経験のある医師8名の懇談形式で行われた。最初裁判所より医事関係訴訟を巡る現状と課題の説明を受けた後、鑑定人候補者推薦から実際の鑑定の方法について活発な意見交換が行われた。

(医学部附属病院)

訃報

このたび、^{ないとうますかず}内藤益一名誉教授、^{まるやまかずひろ}丸山和博名誉教授、^{ほしぎきのり お}星崎憲夫名誉教授、^{いいぬまじろう}飯沼二郎名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に各名誉教授の略歴、業績等を紹介いたします。

内藤 益一 名誉教授



内藤益一先生は、8月25日逝去された。享年98。

先生は、昭和5年京都帝国大学医学部を卒業後、同医学部松尾内科に入局し一般内科学を研修。昭和10年5月から

京都市立宇多野療養所に勤務の後、同16年3月京都大学結核研究所助教授、同29年9月に教授に昇任された。昭和42年6月に改組により結核胸部疾患研究所教授となり、昭和45年4月に停年退官された。その間、昭和35年10月から同39年10月まで結核研究所長ならびに京都大学評議員として研究所および京都大学の管理運営に尽力された。

また、昭和41年7月から同43年7月まで、結核胸部疾患研究所附属病院長として病院の運営と発展に

尽力された。

退官後は、高清会高折病院長ならびに名誉院長を務められた。昭和52年に勲三等旭日中綬章を受けられた。

先生は終始一貫結核症の研究に没頭され特に化学療法研究部の主任として、近代の結核化学療法の進歩に資すること大であった。その志すところは常に現状の化学療法に満足せず、その強化に努めた点にあり、結果として各種薬剤の特性を活かした4者または5者併用の強力な化学療法術式に発展している。また早くより成人結核症の病理的発生に興味を持たれ、その外因性再感染説は日本の結核病学界における画期的な学説として注目された。

(再生医科学研究所)

丸山 和博 名誉教授



丸山和博先生は、9月5日逝去された。享年76。

先生は、昭和28年京都大学理学部化学科を卒業、同大学大学院理学研究科に進学した後、京都大学理学部助手、助

教授、同教養部教授を経て、同47年同理学部教授に任ぜられ、有機化学講座を担当された。平成5年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、平成3年から2年間理学部長を務められた。本学退官後は、福井工業大学教授と生産開発研究所理事長を併任され、続いて京都工芸繊維大学長に就任し、大学行政に貢献された。

先生は、有機化学の分野において多大の業績を挙げられた。有機金属化合物の代表であるグリニャール反応の反応機構の解明、天然産キノン系化合物の全合成研究、化学誘起動的核磁気分極(CIDNP)を用いた光化学反応の研究、光合成反応中心の化学合成とその機能解明など研究は多岐にわたっており、昭和61年には日本化学会賞を受賞された。

また、文部省学術審議会専門委員、日本学術会議化学研究連絡委員、日本化学会副会長、有機合成化学協会理事、同近畿支部長、近畿化学協会評議員などの要職を歴任し、我が国の学術研究体制の強化・推進、関連学会の発展に尽力された。

(大学院理学研究科)

星崎 憲夫 名誉教授



星崎憲夫先生は、9月24日逝去された。享年73。

先生は、昭和31年東京大学理学部物理学科を卒業、同36年東京教育大学大学院理学研究科を修了、立教大学理学部

で日本学術振興会奨励研究生を務めた後、京都大学基礎物理学研究所助手、助教授を経て、同42年京都大学工学部助教授、同55年教授に昇任、同位体工学講座を担任、平成6年量子物質工学講座量子物理学分野を担任された。平成8年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和55年から同57年まで、高エネルギー物理学研究所

教授を併任された。退官後は、平成8年から同15年まで、四天王寺国際仏教大学教授を務められた。

先生は、核力の研究において優れた業績を残され、その発展に寄与された。特に、パイ中間子による核力の非静的効果の検討を行い、核力の一ボソン交換模型の提唱者の一人となられた。さらに、非弾性エネルギー領域における核子・核子散乱の部分波解析の開拓を手がけ、二核子共鳴研究の第一人者として多くの研究成果を挙げられた。また、暖かい人柄で広い学識をもち、量子力学、原子核物理学など基礎物理の分野で教育と研究指導に尽力された。

(大学院工学研究科)

飯沼 二郎 名誉教授



飯沼二郎先生は、9月24日逝去された。享年87。

先生は、昭和16年京都帝国大学農学部農林経済学科を卒業、同学部副手、帝国図書館司書、奈良青年師範学校講師、

国立国会図書館主事、農林省農業技術研究所技官などを経て、同29年京都大学人文科学研究所助教授、同49年同教授に就任され、日本社会研究部門を担当された。昭和56年停年により退職され、名誉教授の称号を受けられた。

先生の専門は、農業史、中でも農学・農法の歴史的研究であった。その研究はヨーロッパ、日本など幅広い地域と時代におよび、『農業革命論』『農学成立史の研究』『地主王政の研究』など多数の著書・

訳書を出されるとともに、近世日本の農書を体系的に収めた『日本農書全集』(全72巻)の刊行に力を尽くされた。

人文科学研究所においては、世界資本主義の歴史的解明をめざす共同研究に参加、『世界資本主義の歴史構造』などを編集された。また、朝鮮近代史に関わる共同研究を組織され、『近代朝鮮の社会と思想』『植民地期朝鮮の社会と抵抗』を編集・刊行された。

先生は、篤実なキリスト者として日本のキリスト教史、特に朝鮮に関わったキリスト者についての研究も進められた。ベトナム戦争に反対する市民運動や、個人雑誌『朝鮮人』の発行など、社会的な活動にも力を注がれたことを記しておかねばならない。

(人文科学研究所)

お知らせ

化学研究所第105回研究発表会

1. 日 時：12月2日（金）10：00～17：50
2. 場 所：化学研究所共同研究棟 大セミナー室
3. プログラム：
- | | |
|---|------------------|
| 挨拶 | 所長 江崎 信芳 |
| スピン流による磁化状態制御 | 磁性体化学 小野 輝男 |
| 高分子電解質溶液における相互作用反転と構造形成 | 高分子物質科学 西田 幸次 |
| 所長賞・学生奨励賞 授与式 | |
| 所長賞受賞講演 | |
| 所長賞（学生奨励賞）受賞講演 | |
| －ポスターセッション（13：00～14：40）67件－ | [於 共同研究棟 ライトコート] |
| 「化研らしい融合的・開拓的研究」発表 | |
| ・有機無機ハイブリッド低融点ガラスのガラス形成過程の探求と光機能性デバイスへの応用 | 徳田 陽明 |
| ・先進的レーザー質量分析法の開発とその応用 | 清水 政二 |
| ・バイオインフォマティクスとバイオケミストリーの連携による代謝パスウェイの解明 | 三原 久明 |
| ・磁場応答性コロイド結晶の新規開発 | 大野 工司 |
| 植物の「かたち作り」と「環境応答」を繋ぐ制御因子の解明 | 生体分子情報 柘植 知彦 |
| 化合物構造比較法に基づく酵素反応特有な原子変換パターンの解析 | 生命知識システム 服部 正泰 |
| 海洋のプルトニウム同位体の起源解析のための化学的アプローチ | 水圏環境解析化学 則末 和宏 |
4. 参加費：無料（申込不要）
5. 問い合わせ先：化学研究所担当事務室 E-mail：koho@scl.kyoto-u.ac.jp FAX：0774-38-3014
詳細は化学研究所ホームページをご覧ください。
http://www.kuicr.kyoto-u.ac.jp/event/rp2005_105.html

能楽鑑賞会

課外教養行事の一環として、日本の伝統芸能の能楽鑑賞会を以下のとおり企画しました。本学学生・教職員各位におかれましては、是非この機会に狂言と能楽を堪能してください。

来場をお待ちしております。

1. 日 時：12月7日（水）開場：17：30
開演：18：30（開演後の入場はご遠慮願います。）
終演：20：30（予定）
2. 会 場：京都観世会館 京都市左京区岡崎円勝寺町44 TEL：771-6114
(東山仁王門を東へ約300メートル)
3. 演 目：狂言 ^{ウオゼツキョウ}魚説教 茂山千作
能楽 ^{イヅツ}井筒 片山清司
植田隆之亮
片山九郎右衛門 他

- 備考1. 入場無料（入場の際は、学生証又は職員証を提示してください。）
2. プログラムは当日に会場で配付します。
3. 定員は550名先着順とします。
4. 問い合わせ先：学生部学生課課外教養担当 TEL：（内線）2511 又は 2588

（学生部）

第8回 情報学シンポジウム ユビキタス社会の未来を拓く情報通信技術

1. 日 時：12月13日（火） 10：00～17：00
2. 会 場：時計台記念館1階 百周年記念ホール
3. プログラム：「情報通信技術が拓くユビキタス社会」

ユビキタス・コンピューティングの未来	東京大学教授	坂村	健
ユビキタスネットワーク社会の市民、産業、政府および大学			
	客員教授／野村総合研究所	横澤	誠

「ユビキタス社会を創造する情報通信技術」			
センサネットワークタウン実証実験	教授	吉田	進
ユビキタスホームの構築と生活支援実験	教授	美濃	導彦
ユビキタス社会を実現するネットワーク技術の新展開	教授	高橋	達郎
4. 定 員：500名（先着順）
5. 参 加 費：無料
6. 申し込み・問い合わせ先：FAX：075-753-5379 E-mail：symposium@i.kyoto-u.ac.jp
詳細はホームページをご覧ください。 <http://www.i.kyoto-u.ac.jp/is/>

再生医科学研究所平成17年度学術講演会

1. 日 時：12月22日（木） 10：30～17：00
2. 会 場：芝蘭会館稲盛ホール（左京区吉田近衛町京都大学医学部構内北側 TEL：753-9336）
3. 講演 会：10：30～17：00 参加無料（来聴歓迎・事前申込不要）

「ES細胞を用いた心血管分化研究 - 構成的発生生物学の試み -」	幹細胞分化制御研究領域	助教授	山下 潤
「受精メカニズムの解明」	再生実験動物施設	助教授	近藤 玄
「ES細胞における分化多能性と増殖」	再生誘導研究分野	教授	山中 伸弥
「組織形態分化誘導の新しい機構とその応用」			
	組織分化制御学研究部門（寄附研究部門）	特任助教授	平井 洋平
「正常および悪性造血における分化制御機構」			
	九州大学病院 遺伝子細胞療法部	教授	赤司 浩一
「関節軟骨における水和潤滑」	ナノバイオメカニズム研究領域	教授	池内 健
「1分子追跡・操作によって細胞のシグナルシステムを解く」			
	ナノバイオプロセス研究領域	教授	楠見 明弘
「マイロ加工技術を利用した生体分子1分子計測」			
	大阪大学産業科学研究所 高次細胞機能講座	教授	野地 博行
4. 懇 親 会：17：30～19：00 芝蘭会館山内ホール
会費 1,000円 申込必要（FAXまたはE-mailにて受付）
5. 問い合わせ・懇親会申込み：京都大学再生医科学研究所学術講演会事務局
FAX：075-751-4646 E-mail：shomu@frontier.kyoto-u.ac.jp
詳細は再生医科学研究所ホームページをご覧ください。
<http://www.frontier.kyoto-u.ac.jp/index-j.htm>

編集後記

秋も深まってきました。秋といえば、芸術、食欲……と、大学でも、構内のあちこちで紅葉が真っ盛り、京都市芸大と共催でオペラコンサートが時計台記念館で開催され拍手喝采、尾池総長プロデュースのカレーが大反響。皆さんそれぞれの秋を満喫。また、朝夕めっきり冷え込んできました。鳥インフルエンザのニュースが連日のように報道、体調管理には十分注意しましょう。予防は最大の防御ですよ。